

あいだのすみっこ不定期漫遊連載 第49回

国境を跨ぐ交渉と規範の葛藤と：
東アジア近代美術研究の将来にむけて III
AASアジア研究学会ボストン年次大会・報告

ワシントンからの目も乱打む 4
(Memo randum from Washington No.2
: as of Apr.11, 2007)

稲賀 繁美

(いながしげみ/国際日本文化研究センター、
総合研究大学院大学)

Session 181

もうひとつ、方法論的な議論として取り上げておきたいのは、Japan Art History Forum の後援によって開かれた Patterns of Inattention : Taxonomic & Lexical Forces in Japanese Art Historyである。学術的な議論の前提とされる術語の枠組みが、ともすればそうとは注意を引くことなく、議論の土俵を事前に決定してしまっている。その様態から或る型を抽出できるならば、無反省にそうした枠組みにとらわれて議論を進める轍を回避できるのではないか。評者としていささか我田引水に要約した嫌いもあるが、概略そうした問題意識にそって、それぞれ「四条派」(Tim Clark, British Museum), 「戯画」(Milliam Wattles, University of California, Santa Barbara), 「洋画」(Bert Winter-Tamaki, University of California, Irvine), 「禅」(Gregory P. Levine, University of California, Berkeley) という用語に的を絞り、括弧内の論者によって批判的・文献学的考察が展開され、それを受けて参加者による討論がもたれた。その議論を要約する代わりに、ここでは Melissa McCormick や Toshio Watanabe らが十分論及しなかった4点に絞って、簡潔に問題を提起したい。

まず第一に、個々の術語の守備範囲や用

法の歴史的文脈を吟味する必要はいうまでもない。先述の侘び、寂び、幽玄に戻るなら、すでに本連載(第32回、111号)でも触れたことだが、wabi, sabi が Oxford English Dictionary に組み入れられるのは1935-6年の出来事。それらの認知にArthur Waley, Daisetz Suzuki らの著作が直接預かって力あったことは、用例からも明白だ。幽玄にいたっては、これが謡曲を特徴づける美学として五十嵐力により摘出され、一般に定着したのは1910年代。国文学の世界ではこの後の世代において初めて、日本文学を貫く美学的、あるいは文藝学的理念をめぐる省察や理論化が目覚しくなる。市古貞次の名前が議論に出てきたが、国文学界では、彼に先行する久松潜一の『日本文学概説』(1931)、また文藝学の分野では岡崎義恵の『日本文藝学』(1935)、美学ではやや遅れ大西克禮『幽玄とあはれ』(1939)、『雅雅論—「さび」の研究』(1940)などの議論が、そうした風潮を代表する。

第二には、術語の意味作用に関する議論が、ソシュール構造主義言語学以前の水準に逆戻りしたのでは、お話になるまい。すなわち個々の術語はそれによって排除する部分を相互につくり、場合によっては用途の水準に応じて重畳する。その全体が織り成す星座の布置 configuration を視野に収

めなければ、議論は堂々巡りに陥ってしまう。文学研究の世界では、江戸期までの文学ジャンルがいかにして近代に入って、西欧のジャンル意識に接触して全面的な組み換え reconfiguration を蒙ったかに関して、ドイツではヴォルフガング・シャモニーの研究、日本では『日本の文学概念』をめぐる鈴木貞美の研究 (*The Concept of Japanese "Literature"*, 国際日本文化研究センター叢書, 2006, Royall Tylerによる英訳) がある。縦軸に時代を、横軸にジャンルの雅俗を配し、再編成の様を描く全体像の地図が、概念化には不可欠だ。

第三にこれと密接に関連する論点だが、翻訳を通じた異文化の接触面でどのような混乱、葛藤ないし組替えが発生しているかにも、あわせて注目せねばなるまい。今回の討論ではこの点に関する言及が皆無であり、あたかも日本の曖昧かつ流動的な術語を英語でいかに解釈すべきかの議論ばかりに終始していたのが、評者としては、きわめて奇異に映った。というのも、すでに見たとおり、中国語の世界ひとつ取ってみても、1936年の段階でなお、西欧語の Fine Arts の訳語として日本経由で輸入された「美術」 meishu 概念のうちに何を含めるべきか、合意が成り立たず、中国側の見解と欧米での提案に齟齬をきたしていたことが、上海、倫敦、紐育の展覧会の構想の差異として露呈していたからである。

正統な術語を歴史的に確定する作業の下には、術語に正統性を纏わせようとする歴史の力学が働いている。この仕組みに盲目的な議論は、結局は歴史そのものの力動性によって足元を掬われることとなるだろう。正統性 authenticity とは、それを享受する受容者に天から与えられるものではなく、それを享受するばかりか、その強制力に恭順する受容者の集団的な要請・認知によって形成される、という転倒をふくむ機構の謂なのだから。そして異文化間の接触面 contact zone は、時にそうした正統性をめぐる闘争の前線を露呈させ、時空の振れを集約して開示する特権的な「場所」として、

注目に値する臨界面となる。

Session 223

ここまでの準備を経てようやく、参観できた最後のセッションに議論を移すべき段取りとなった。Old Leftovers: Qing Yilao and Traditional Culture in the Chinese Modern, すなわち「清の遺老と近代中国における伝統文化」では、まず Academia Sinica 台湾中央研究院近代史研究所の王正華 Cheng-hua Wang が、中華民国初期に清朝遺臣が文化生産にいかに関わったかを検討した。彼女の発表で、再び期せずして、だが当然にも、羅振玉の業績が主たる対象となった。清末から民国初期に至る図録類を調べると、たとえば青銅器の場合など、金石学 jinshishue では、甲骨文字もふくめて、もっぱら銘文の解読に関心が限定されていたものが、器物学 qiwushue, 古物学 guwushue などという研究分野が確立するにつれ、三次元の造形に対する関心が発芽する様子もうかがえる。中国での器物の分類は、四庫全書にも見られるように、金石 jinshi と書画 shuhua との大きくふたつの項目に分かれるが、葬祭副葬品としての人型偶像などは、こうした伝統的な分類には馴染まず、清朝最後末期以降、ようやく学問的研究の対象に組み入れられた様子を、王氏は詳しく跡付けた。故物学 guwoshue などという分類枠も存在し、さらに古物研究所がやがて博物館 bowuguan へと脱皮するに至るが、その制度的な変遷や、範疇区分の連続や断絶に関して、評者はなおきわめて不十分な知識しか持ち合わせがなく、高度に専門的な王氏の議論の細部には、遺憾ながら着いて行けなかった。会合の後、University of Sussex の楊佳玲 Chia-Ling Yang や John Hopkins University の梅爾清 Tobie Meyer-Fong から、有益な情報を提供していただいて、関連分野の研究会が目白押しな様子を知らされた。

清朝の崩壊にともない日本へと亡命し、清朝復辟に尽力し、晩年には日本による傀儡政権・満洲国の文化事業にも関与した羅

振玉は、政治的には現在でもなお国賊との侮蔑的な評価に晒される一方、文化事業の側面では、西洋の学術を取り入れて中国の学問伝統を刷新し、中華の民族的文化遺産の保護・顕彰に努めた功績を、肯定的に賞賛される文化人でもある。質疑応答で、前田環の問いへの解答にもあったように、骨董業者はいまでも羅振玉の鑑定を自らの権威付けに利用する反面、学者には羅による見立ての信憑性に疑義を呈する向きが多い。真偽鑑定や古物売買の現場に棹を挿した人物には、遺産救出の功績と裏腹に、贋作の流通幫助の弊も免れなかった。その功罪の評定は、なお将来の課題だろう。

続くUniversity of Hawaii, Manoa 校の Shana J. Brown は、民国初期から20-30年代に時代を移し、愛好者たちによる古物蒐集に関して報告した。数多くの固有名詞のなかには、魯迅 (Luxun 1881-1936) や周作人 (Zhuo Zuoren 1885-1967) 兄弟も登場したが、かれらの古物所有や古代文化への思いを anxiety という言葉で括ろうとする論者の見解には、その意図や効果について質問があがった。一般に西洋の考古学の術語で中国の骨董趣味をとらえようとする、中国固有の語彙や分類枠と互換性がないため、議論がきわめて粗雑になりやすい。合切袋の西欧語にすべてを詰め込んで議論をするか、反対に中国語の術語を訳さずそのまま用いて議論をするかの、二者択一に陥りがちだ。前者では古物、故物、古文物あるいは古董学、器物学、古物学といった、中国での区別はすべて犠牲にされてしまう。逆に後者の選択をすれば、「古物研究所」と「博物館」の違いは聴き取れるが、その実態にはわかに捉み難い。漢語に習熟していない英語圏の一般聴衆には、聞き慣れぬ固有名詞の洪水に暗号同様の専門用語の羅列を聞かされるに等しい。中国語の微妙かつ煩雑な学問体系や、文房四宝愛玩の骨董趣味特有の意味表現を、もっぱら聴取によってのみ理解するのは、すこぶる困難だ。いかにも面倒だが、漢字表記に英訳を添えた図示の工夫は不可欠だろう。

ここにさらに骨董を扱う現場の利害が加わってくる。三番手の発表者 Nixi Cura は Christie's Education に勤務する現役の鑑定士であり、まだ若手ながら、実物の文物を掌に廻らして、中国と欧米と間の商取引をも臆することなく引き受けてきた、現場の実力者らしい貫禄を遺憾なく見せ付けた。1915年に日本の京都で催された大正天皇即位を記念する展覧会では、中国の美術品が特別陳列されたという。そこには溥儀の弟が馬の絵を出品しているが、馬は忠義を表象する図像であり、図柄も清朝の王室蒐集にふくまれた古画に則った作品だった。王位の正統性を主張する意図が、選ばれた主題に明確に示されていたことになる。本展では「美術」の枠のなかに金石と書画の区別がなされたが、花鳥画の類は装飾美術の範疇に分類され、金石のなかに組み入れられたという。このあたり、当時の日本における「美術」意識と、同時代中国との接触の機微に触れる、貴重な証言とも言えそう。この折に出版された図録は、定価六円だったというが、当時の勤め人の平均的な月収は、まずは三十円程度であるから、いかに破格の豪華図録だったかも、想像に難くない。日本の皇帝の即位の儀を格好の機会として、その舞台裏では、政治的な画策と、日本人商人による中国美術市場への参入とが複雑に絡み合い、あるいは贋作や複製の流通を助長して、中国骨董の真偽^{しのぎ}鑑定をめぐる、目利きや愛好者たちの編合いが演じられていた。思えば、他人から借用した古画を自ら模写して、模写の方を貸し主に返したが、すり替えの事実が露見しなかった、というのは、八大山人の著名な逸話だが、それを今に再現したような、張大千の古画複製と、「贋作」捏造の顛末も、あるいはこの時期の日本骨董市場の投機熱との関数として理解できる事件ではないだろうか。

ディスカッサントに招かれたYoke University の Joshua. A. Fogel は、かつて内藤湖南に関する博士論文を執筆した経歴から、羅振玉と内藤との関係などに絡めたコ

メントを期待されたものらしい。期待に反して一般的な質問若干に限定されたフォーゲルさんは、飛行機便の急な時刻変更のため、講評後そそくさと会場を後にされた。このため、残念なことに、久しぶりにゆっくり議論を交す暇もなかった。だが、内藤湖南にいたるさまざまな人々の交渉を復元してみると、意外な事実がおのずと浮き彫りにされてくる。すなわち、清朝から満洲国にいたる歴史の軌跡には、たんに日本による傀儡政権の捏造というだけでは済まされない、文化史的な底流が伏在しており、そこには辛亥革命前後以来の日本人知識人、さらには大陸浪人やアジア主義者たちの大陸への関与と策動が深く関わっていた様子も、書画・骨董の流通から見えてくる。

また、ふたりめのディスカッサントとなった Boston University の Qianshen Bai は、金石と書画という区分からは除外された文房四宝(筆、硯、墨、紙)の賞玩や蒐集が、実際の骨董市場では、より大きな比重を占めていたこと、さらに七宝焼が珍重されたこと、加えて陶磁器や青銅器に関する学問が、近代には珍物学 zhengwoshue といった分野に統合され、政治家の王国維(Wang Guowei, 1877-1927)をはじめとする、文人好事家の関心を引いたことなどを、専門家らしく具体的に指摘した。従来の訓詁学、考証学や金石学が、西欧との接触を経て、絵画中心の美術市場に置き換わる、といった一般的な図式では到底汲み尽せないような、中国趣味人たちの奥深い蘊蓄の世界を垣間見せられた。ここでも、この分野特有の術語に加えて、著名な骨董商や収集家の名前が多く指摘された。評者は現段階では、これらを即座に漢字で筆記できるだけの素養は身につけていない。多くの重要な指摘を聞き落としていることも、ここに白状しなければならぬ。さらに羅振玉も関与した敦煌の文物・經典研究については、それらの発見に関わったポール・ペリオ(1878-1945)の探查活動や、エドゥアール・シャ

ヴァンヌ(1865-1918)やオーレル・シュタイン(1862-1943)などの欧米の専門家による翻訳活動も、質疑応答のなかで関連して言及された。

このように見てくると、オズヴァルド・シレンに先行する、欧米の中国学の伝統も、列強による蚕食のなかに置かれた中国現代史の現場に再び位置づけて、その文脈のなかで検証し直す必要があるだろう。いささか余談となるが、羅振玉の蒐集のうち、大谷光瑞旧蔵の品で、日本で刊行された中国白話小説などは、所蔵先の大連図書館において、作品別に特注の桐箱に詰めるなど、周到な保存措置が取られ、また稀刊本の復刊もすでに実現している。だが旧満洲国に関する文化事業に羅振玉がいかに関与していたかの実態は、大陸中国では、いまだに詳しい検証を受けるには至っていない。「満洲国」をおおっぴらに冠することそのものが、なお行政的な措置としては忌避されている事情もあり、大連図書館でも満鉄関連資料を、満鉄旧分類のままで研究することは、許可されるに至っていない。最初に結論ありき、の全面的・一方的断罪という扱いを越えて、日本帝国の大陸進出あるいは侵略の実相に迫ることなくして、戦前・戦中期の東・東北アジアの文化史は見えてこない。ともすれば美術史という分野は、政治とは無縁の美の世界と誤解されがちである。だが美術遺産をめぐる政治学は、広義の植民地主義の時代を解明する、ひとつの重要な鍵をなしていた。日清戦争から偽満洲国崩壊に至る過程の考察なくしては、20世紀前半の日本近代の理解はありえない。今回のAASに参加して、改めてその認識を新たにしたい。

This article is the 3rd part of the report by Inaga Shigemi on the annual meeting of the Association for Asian Studies (March 22-25, 2007, Boston Marriott Copley Place).